

パネルディスカッション

小泉氏 持続可能な街づくりへヒントを探りたい。それぞれの活動を紹介してください。

▽6本の大きな活動の柱

神東氏 静岡県中部の大井川沿いに川根本町はある。エコティは地域の経済に寄与したいということ。とても小さな法人で会員は70人ほどだが、名前も少しずつ浸透してきた。大きな活動の柱は6本ある。一つは地域資源を活かしたツーリズム。南アルプスユネスコエコパーク関連や移住定住と、観光に限らず川根本町の活性化に結び付くことには何でも取り組んでいる。川根本町は自然資源にとっても恵まれている。それは裏を返



神東氏

せば自然資源しかないということ。

町の自然にかかわるところすべてが活動のフィールド。エコツーリズムは自然と文化を守りながら産業や観光の発展を目指すというもので、ただ守るだけではなく、人々の経済活動が伴って発展するものと考えている。環境を守り、観光を発展させる、地域を元気にするという役割を持っていく。私たちはエコツーリズムを通して観光に力を入れていく。川根本町で有名な観光スポットは寸又峡の夢の吊り橋、さらに大井川鉄道が走り、機関車トーマスも全国的に有名になった。でも目指すのは大きな観光ではなく、地元の人による地元のための観光だ。地元の人々が誘客方法を考えておもてなしをする。例えば井川線のトロッコ電車に乗って紅葉見物するのが一般的だが、私たちはカメラに乗っ

川根本町には可能性がある

て下から紅葉を眺める、そして井川線の乗客に手を振るといった視点を変えて自然を楽しむツアーに取り組んでいる。たくさんさんの自然資源があってもそれを活用する人がいなければツーリズムにはならない。なぜこういう活動をしているのかというと、川根本町のファンをつくりたい。お客さまの4割はリピーター。草の根的な活動だが、それは自然だけでなく、おもてなしをする地元の人々のファンにもなっている。あのガイドさ

●パネリスト

- | | |
|--------|--|
| 神東 美希氏 | 一般社団法人
エコティかわね事務局長 |
| 小島 孝仁氏 | CSA 不動産社長 |
| 小松みゆき氏 | 一般社団法人
しずおか観光・産業戦略推進機構
理事、レイライン代表取締役 |

●コーディネーター

- | | |
|--------|----------------------------|
| 小泉祐一郎氏 | 静岡産業大学情報学部教授
(当懇話会研究委員) |
|--------|----------------------------|

んに会いたいと来てくださる人も多い。

本当に地味で小さな活動だが、地元ならではの体験型観光が回遊につながり、それが川根本町全体の活性化に結び付くと信じている。

▽観光で稼げる地域に

小松氏 もともとは旅行会社の出身。日本版DMOという新しい観光組織が観光庁の旗



小松氏

振りで全国につくられている。観光産業は人とのつながりがとても深い。つながりで成り立っていることが多い産業だが、役所がつくる組織は往々にして3年とか5年とか任期の関係があり、そのたびに担当が変わると今までとちよつと違う方針になったりする。だから観光こそは民間、民の力でできないかと、とても思っ

ていた。DMOという組織を調べていくと、欧米ではDMOというよりDMCとカンパニーでやっている組織が多いことに気づいた。私も何とか民の力でできないかと考えた。県立大の北上真一特任教授のオリンピック後の経済発展の講演の中で、ロンドン五輪後は成長が落ちなかったという話があったが、それにはDMOがともかかわったと言われている。そうした中で日本も2020年の東京五輪・パラリンピック後をどうしようと考えられたのが日本版DMOだと言われている。早い話が地域のために観光で稼ぎましょうということだ。それを総合的にマネージメントする地域の観光の総合商社を目指している。

静岡ホビークエストに来ていた人たちはいろんな所に立ち寄っていることがアンケート調査でわかった。食事も会場の周辺でしている。それで会場周辺の食事マップをつくることにした。一万五千部つくり、一万四千部をホビークエストに配った。長年、ホビークエストを訪れているバイヤーからこういうものが欲しかったとお褒めの言葉をいただいた。このように民間の機動力を生かし、地域全体で街づくりを進めることが重要だ。

▽旅は「非日常」の提供
小島氏 大きな目標は世界の方が静岡県にぜひ行ってみたい

い街にしたいと思ひ取り組んでいる。始めようと思ひつたきっかけはいくつかある。中心市街地も空き店舗が増え、店舗を埋めても空き店舗の増加を防ぐことがとても難しくなっている。根本的に空き店舗の増加を防ぐには消費者を増やす以外にない。いかに遠くから消費者を呼び込むか、10年ぐらい前から考えてきた。では何を始めたらいいのか



小島氏

全く違う表情見せる用宗

考えた。プライベートで用宗に引越す縁があり、引越越しをして実際に海岸線を走り、路地の中を歩いて見たりするととても面白いものがたくさんあることに気が付いた。

でも宿泊施設がない。これは弱点だと考え、旅行者にまずは泊まってもらうことを考えた。ではどんな宿泊施設にするか。用宗には10年以上も放置されている古民家がたくさん点在している。それ以外にも20棟以上壊されて更地になっている。こうした民家を観光資源として何とか活用できないかと思ひ、ホテルにしようと考えた。最初は三棟から始め、12月には計六棟に予定だ。使える建具は再利用しているが、梁と柱以外はほとんど作り直さないといけない状態だった。「旅は何か」というと非日常の提供だと考えている。用宗駅に降り立ったお客さまを非日常の世界に引き込む。そのために外国人スタッフも準備した。わざわざうちで働きたいと他県から移住してきたスタッフも

いる。地域性を感じてもらうために朝食は近所のお母さんに宿で普通の家庭料理を提供してもらっている。

旅行先で記憶に残る一つはその地域、地元の人との触れ合い、そして会話が記憶に残る。用宗がなぜ観光地になるかと考えた理由として観光は歩けることが重要だ。用宗はコンパクトな地域の中に三つの全く違う表情を見せるエリアが存在する。一つは路地裏エリア。日常、細い路地を歩く機会はそれほど多くない。外国人には日本の細い路地を歩くだけで冒険しているような感覚になる。そしてビーチエリアと漁港エリア。魅力的な海岸線と活気良く行き交う漁船を見るだけでも日常から引き離してくれる。

宿泊施設の安定した稼働率を確保する上で観光地に温泉があるかないかは重要だった。用宗に温泉はないので掘るしかないとした。9月に掘削を終え、今は建物の内装と外装は最後の仕上げの段階に入っている。



私たちの取り組み、情報などのように多くの人に知ってもらおうか。最初に取り組んだことは用宗を紹介するサイトを作った。富士山が見えるスポットとか、用宗の飲食店などをPRしている。これらは多言語化して発信している。

用宗いいねと言ってくれる。それが段々誇りになり、街への愛情、愛着、郷土愛になって将来のUターンにつながると思う。

小泉氏 川根本町に定住した理由を聞かせてください。

▽期待されやりのがある

神東氏 川根本町は可能性がすごくある。すでに出来上がっている地域に入るのではなくて課題があり、そうした課題に取り組めるとか、若い人材が少ない地域なので自分に役割を与えてもらって期待してもらえませんか。そうしたことにとてもやりがいを感じた。おそらく地元に戻るとただのOLになってしまう。川根本町にいると大事にしてもらえている。そうしたことが川根本町にいる理由。

小泉氏 観光とモノづくりの関係は何ですか。

▽あらゆるものすべてが観光の要素

小松氏 観光の素材というものは自然の素材とか、最近多い農業体験とかが言われている。観光と産業はあまり関係

街づくりに民間の力活用

がないイメージでとらわれがちだが、あらゆるものすべてが観光の要素になると考えている。企業視察で訪れた会社でいろんなものを見せてもらうがものすごく面白い。モノづくりを観光という形で見せることはものすごく可能性があると思う。例えば飲食マップの作製でグランシップ周辺の飲食店を軒並み回った。こういう趣旨でこういうマップを作りたいので掲載させてくださいとお願ひしたが、「うちはお客さん十分来ているから」と断られたところもあった。意外なことに大きなチェーンは「そういうことならぜひ載せてください」という声が多かった。これは新しい発見で、地域と一緒にやりたいという気持ち強いことがわかった。地元の方は一元の観光客が来ることでもともとのお客に迷惑をかけることが嫌だったというのが断られた理由だった。

▽人柄で人材選ぶ

神東氏 役所でも観光と農業は担当課が違うのと同じで観光と農業が交わることはほと

んどない。観光をやる、農業をやるという意識をまず互いに持つことが最初のステップ。ただ、あくまでも農業、観光が本業なのでお客さまを受け入れるために無理をして本業に支障が出てしまうのは望ましくない。集客とかメニュー作りはある程度は事務局でやる。農家には収穫の指導とか、お茶を入れるとかあまり負担をかけすぎない。お客さまとの触れ合いはみなさん楽しく喜んでやっている。また次もやってもいいよというように負担にならないように気を付けている。話好きとか、人好きとか人柄や人格で選んでいる。

小泉氏 地域との連携で工夫していることは。

▽課題は朝食の提供だった

小島氏 先ほども述べたが、用宗で宿泊業を始めるにあたって問題の一つは朝の食事をどう提供するかだった。たった3棟の宿で3組のお客様に泊まっていたら、そのために食堂、レストランをつくることもできなかった。悩みに悩んで行きついたのが地元

のお母さんに宿で食事を提供してもらったことだった。それが特に旅慣れた外国人旅行者に非常に評判が良かった。用宗に来る人は旅慣れた人しか来ないと最初から思っていた。

旅慣れたお客さんは大きな店に行くより地元ローカル色に強いお店に行くことを楽しみにしている。用宗にはそうしたお店が多い。

小泉氏 どうやって財源を確保したか。

▽地元企業に出資を依頼

小島氏 古民家の宿をつくるにあたり、金融機関に行き用宗で観光専用のホテルをやりたいと言ったら頭がおかしいような顔をされた。「だれが用宗に来るのですか、小島さんは観光業やったことないですか」と言われ、全く話が前に進まなかった。本業は不動産業であり、不動産というものはほぼ確実に融資で買うものであり、金融機関とは良好な関係を長年にわたって築いてきた。どのようにすれば金融機関が融資してくれるかはある程度心得ていた。その中で

観光業をやったことがないから観光業をやっている会社の信用を借りるしかないと考え地元企業に出資をお願いし、金融機関からの融資を受けられることになった。

▽移住定住の仕事始める

神東氏 もともと前身の組織が役場の中にあつたので、川根本町の仕事を受託してやらしていたので、資金繰りの苦労はそれほどない。移住定住の仕事も今年から始めた。なぜかという、外から来た人が町に定着して仕事をする、子育てをしていく中でいろんな人の新しい力があれば観光にも波及し、就農



小泉氏

すれば農業にも波及する。

小泉氏 どうしてそんなに街づくりに取り組むのか。

▽やるうつといふ覚悟持つ

小島氏 いろんな国を旅行し

全国のモデルケースに

てきた。旅行は密度が高い時間だと思っている。ある時、イギリスのケンブリッジで出会った若い女性と話す機会があり、「ケンブリッジ以外のどこかの国に住みたいと思う」とはある」と尋ねると、「ないケンブリッジ以上に素敵な街なんてあるの」と聞かれた。何て素晴らしい言葉だろうと思つた。今後は静岡をそうすることはできないかと考えて10年間。たまたま用宗という魅力ある場所に流れ着いた。用宗は本当に素敵なのがある。どうやってきてもらうか、10年ずつと考えてきた。本当にやろうと思つたら生涯かけて覚悟をきめてやるしかない。

▽旅行業は接着剤

小松氏 旅行業はいろんな産業をつなぎあわせる接着剤という仕事だと思ふ。例えば東京からお茶の体験をしたい家族を静岡に案内してお茶摘みとかに触れた人がお茶をつくる大変さとかを知り、お茶を買ってくれるとか。モノづくりの現場を見ることで製品とか普段何気なく使っているも

のがこんなふうに見えるとかを知り、モノを大切にしたいとか。観光とはいろんなことをつなぐ要素になると思う。日本版DMOという構想が出たときにこれで日本の観光は本当に変わると思った。この機会が最後のチャンスみたいな気持ちで取り組んでいる。

▽役割はコントロール

神東氏 自分は物事を慎重に進めるほうで今一つバカになり切れないところがある。会員の皆さんはいい意味でバカ者で、そういう人たちが走っているところをうまく手綱を引いてコントロールしている役割だと自分は思っている。頑張っている人たちが支えて楽しんでやってもらえるように仕向けるとか、水面下では自分がやり、華々しいところはうちのガイドさんとか、元気な人が思い切り楽しんでくれればいい。そこから私自身も元気をたくさんもらっている。

小泉氏 パネリストのみなさんの活動は全国のモデルケースになる要素を持っている。さらなる活躍を期待します。